

聖マリア国際協力ニュース

第 101 号

平成 21 年 1 月 1 日発行

ラオス国スタディツアーの感想

※国際事業部では、実際の国際協力の現場での経験を希望する職員に対して、職員教育の一環として、ラオス国における ISAPH の活動視察、およびインドネシア国タムリン病院グループの活動視察の 2 つのスタディツアーを実施しました。以下はラオス国のツアーに参加された伊藤さん（リハビリセンター）の報告です。



ツアー参加者と現地スタッフたち

開発途上国については、これまで文章や写真で情報を得るしかなく、「途上国とはどんな所なのか」を実感として感じることはできなかった。今回、文化の違いを体験し、ラオス国の病院形態、当院と連携して活動している ISAPH

の実際について視察する機会をいただいた。私たちは、病院関係では首都ビエンチャンにある国立マホソット病院をはじめ、カムアン県病院、郡病院、タムライヘルス・センターを訪問し、トップクラスの病院から地方の施設まで見学することができた。また、ISAPH が母子保健の支援をしているコクトーン村での実際の活動も見学することができた。

病院見学では、やはり地方に行けば行くほど衛生管理等のレベルは低く、病院の敷地内に家畜が放たれ糞尿が散乱していた。またカルテを見たところ、血圧測定は行っているものの、「90/50」といったように、一の位を切り捨てた簡略な記録しかされていない。また聞くところによると、かつて県病院では、時間ごとのバイタルサインのチェック表には数値は1回目しか記入されておらず、後は（横線が引かれているだけで）記入が省略されており、計ったかのような体裁を取り繕っている状況であったという。幸いにして、青年海外協力隊の指導が実を結び、私たちの訪問時にはこの点は改善されていた。また職員は少なく、看護学生が（名目上は実習であるが）事実上の労働力として頼られている状況であった。そのうえ、職員は病院勤務だけでは生活するのに十分な収入が得られないという理由で、勤務時間中に稲刈りに出かけるということも行われている。このように多くの職員が副業を持っているという状況は病院職員に限ったことではなく、例えば学校職員の間でも同様の事が行われているらしい。

国立病院では、予想以上に充実した医療機器が備えられていたが、実際の診療の現場を見学すると、どこまで機器の機能について理解され、活用されているかについては疑問が残った。一方で国立病院の



現地での ISAPH の活動の様子

スタッフのモチベーションは高く、外国で研修を受けた経験がある人も少なくない。中には当院やその他の日本の病院に研修で来た方もおられ、日本語で私たちを出迎えてくれた。

今回のツアーでは、ISAPH のスタッフや青年海外協力隊員など、実際に国際協力に関わる方々の生の声を直接聞くことができ、とても考えさせられるところが多かった。中でも印象的だったのが、ISAPH の支援活動に携わる現地ボランティアである VHV (Village Health Volunteer) の一人が出産時に母子共に亡くなったという話である。母子保健の向上を目指し活動を行っている ISAPH スタッフにとっては、あまりにも辛い経験であったことを聞いた。

また驚かされたのが、ラオスでは1歳未満の乳児には名前をつけず、「男（女）の赤ちゃん」等と呼ぶことが多く、もしその児が亡くなった場合には葬儀が行われることは稀であり、遺体は廃棄物のように処理されるということであった。実際にはラオス人は1歳未満の児も非常に可愛がっており、1歳以上の児と分け隔てはしていない。このことを考えると、なかなか日本人には理解が難しく、文化の違いを痛感させられた。

今回のスタディツアーの志望動機であった「実際に開発途上国に出て、直接的な国際協力を行ってみたい」という気持ちは現在も変わらず持ち続けている。今回語学の重要性を痛感したので、この点は精進していきたい。また国際協力部・ISAPH スタッフをはじめ、多くの関係者の方々には大変お世話になりました。このようなチャンスをいただいたことは大変ありがたく、今後の糧としていきたいと思っております。



ISAPH 日本人スタッフと夕食会



国立病院 ICU のスタッフ達と

スタディツアー報告会開催のお知らせ

今回の紙面でも報告をしていただいた伊藤さんを含む、スタディツアー参加者による報告会を下記のように開催しますので、興味のある方はぜひご参加ください。

- 日時 平成 21 年 1 月 8 日（木）17:30 ~ 19:00
- 場所 1 診 2 階大ホール
- 報告者 ①インドネシア国スタディツアー参加者 4 名
②ラオス国スタディツアー参加者 3 名

リハビリセンター 伊藤徹哉



現地の村の一般的な家屋

韓国カトリック医療協会の医師・看護師が列福式救護班に参加

国際事業部 高和珍

2008 年 11 月 24 日、長崎ビッグ N 球場にて、日本における初めての列福式が行われました。この式典には韓国カトリック医療協会の崔榮植会長をはじめ、韓国からも関係者の方々が出席されました。また韓国からは、一般のカトリック信者も多数参加されることを見込まれており、これに対応するため、長崎大学 山下教授が率いる救護班に、韓国江南聖母病院から医師 1 名、看護師 2 名が参加しました。

列福式への参加に備えて、来日前に「ペトロ岐部と 187 殉教者」について学ぶため、カトリック医療協会の事務局では「列福を控え、共に祈る 7 週間」という小冊子を関係者に配布し、7 週間もの間、毎朝お祈りの時間を持ちました。

会場入りした韓国の救護班のメンバーは、式典を目前にして、薬品や機器のチェックなど緊張した面持ちで準備を整えていました。



打ち合わせ中の韓国からの救護班

事前に日本側から薬品・機器の一覧表（英語）が渡されていましたが、薬品のラベル、説明書などは全て日本語なので、大変だったと思います。しかし、皆落ち着いた態度で対応していました。

式当日はあいにく雨天



列福式の式典の様様

で寒かったため、患者さんが多く出るのはないかと心配しましたが、韓国人の患者さんは幸いにして 2 人だけででした。2 人のうち 1 人の方はもともと糖尿病で、長崎旅行と列福式の参加で疲れがたまり、気温がとも低かったことが重なり、低血糖によるショック状態になりました。体を温め、点滴を行ったところ、症状は少し改善しましたが、ご本人がすぐに韓国に帰りたいと希望されたこともあり、救急車で長崎空港まで搬送することになりました。その患者さんのご家族は、「韓国人の医師がいたので、言葉が通じ、本当に助かりました」と何度もお礼を言われ、笑顔で帰国されました。

神様の御恵みにより列福式を無事に終えることができ、本当に嬉しく思いました。

※「列福」とは、キリスト教、カトリック教会において徳と聖性が認められ、聖人（Saint）に次ぐ福者（Beato）の地位にあげられることを言います。今回行われた日本初の列福式ではペトロ岐部、および江戸時代に日本各地で殉教した 187 人が福者となりました。

韓国江南聖母病院見学研修に参加して

8-7 病棟 甲斐田笑子

平成 20 年 12 月 11 日よりホスピスと緩和ケアチームの 7 名で韓国江南聖母病院へ 2 泊 3 日の研修に行ってきました。その中で私が最も驚いたことをご報告したいと思います。

ホスピスの見学に行った時のことです。16 床のホスピスの中で 1 回の勤務に当たる看護師は 2 名だけなのです。なぜなら韓国の病院では家族が付き添うのが当たり前で、不可能な場合は、契約業者に頼んで、代わりに付き添ってもらおうのだそうです。更にそれを支え、活動されているボランティアの方は 50 名も居られるそうで、20 時間以上の研修を受け、更に試験を受けて資格を得ているそうです。

韓国ではボランティアの方が在宅の中でも活躍されています。病院と教会が協力して在宅看護を行い、訪問看護に神父さんと、ボランティアの方が同行され、精神的、霊的苦痛の軽減に大きな力を発揮します。最後を迎える時も、病院より先に教会に連絡が来ることもあるそうです。

ボランティアの方に何が大変か聞いてみると、時間を作ることが大変なのだそうです。恥ずかしながら、私が



江南聖母病院のホスピス病棟にて

今までに経験したボランティア活動と言えるようなことといえば、学生時代に街頭募金に立ったぐらいです。研修を受け、試験を受け、自分の時間を削ってまで、通常の生活では知ることのない人たちのための時間を作る。ただただ「凄い！」と思いまし

た。

2 人に 1 人が癌になり、3 人に 1 人が癌で亡くなられている我が国において、平成 19 年 4 月がん対策基本法が制定されました。それに基づき聖マリア病院もがん拠点病院の認定を受け、緩和ケアチームも患者・家族の苦痛の軽減に向け歩かだしています。

苦痛・悲しみがあるのは残念ながら当たり前です。それをいかに軽くすることができるか。単に仕事と捉えるのではなく、ボランティアの方々のように、無償の愛の精神で接してあげたら、また別の視点で関わることができ、より患者・家族に近づくことができるのではないかと感じた研修でした。このような機会を与えていただき、ありがとうございました。

今月の動き

- 【派遣】
 - ・1 月 11 日（日）～ 3 月 1 日（日）
 - 山崎裕章（国際事業部）：JICA 結核対策プロジェクト結核担当官研修業務のためインドネシア国へ派遣。
- 【入居】
 - ・1 月 26 日（月）～ 2 月 20 日（金）
 - 南東欧地域病院運営コースの実施に際し、セルビア、ボスニア・ヘルツェゴビナ、マケドニアの 3 力国より 4 名が研修。